

# 絵図と地図のはざま

―厚木市本「江戸図」屏風を中心に―

小澤 弘

## 一 絵画と地図

ある地域を表現する二次元的手法に、絵図と地図がある。どちらも、媒体として図という形態を用いるが、絵図は具体的表現で、地図は記号化された抽象的表現である。とくに絵画化された都市図の白眉は「洛中洛外図」である。一方で古く、開田図や条里図、そして荘園絵図や領地争論の裁許絵図が作られた。また寺社の曼荼羅や社寺境内図も作られた。こうした図には地図としての意識とともに、主要な建物（本堂・塔・鐘楼など）や大木あるいは鳥居などが具体的に絵画表現として描かれた。いわば地図のなかに絵図表現が混在するのである。

次項で述べる、日本の都市図では、その構図構成にかかわるものとして地図の存在が指摘されている。そうした意味で、絵図と地図の関わりを考える上でのヒントとなる「江戸図」を取り上げ、その意義を考察する。

## 二 日本 of 都市図―「洛中洛外図」と「江戸図」―

日本の都市を描いた絵図は、室町時代後期から江戸時代にかけて、国際文化史的に見て独自の展開をとげた。とくに応仁の乱後の復興する京都という大都市を金雲を用いて空間と時間との処理をした「洛中洛外図」屏風は、その嚆矢である。この「洛中洛外図」は、四季絵と名所絵の「やまと絵」の系譜を引く名所風俗図として成立した。その都市景観図は、当時の教養人たちの共同幻想ともいべき文化の媒体として制作され、京で、また地方の大名や豪商などから注文されて鑑賞された絵画であった。

そして、そのことは「洛中洛外図」の系譜を引く、近世の武都を画題とした「江戸図」についても同様なことがいえよう。こうした「洛中洛外図」や「江戸図」の都市景観図は、「名所図」、あるいは「風俗図」として表現した絵画という性格を持っている。これらの絵画は、建築史の資料として制作されたのではないし、まして歴史の資料として意図されたものでもなかった。あくまでも「都市の心象風景」を、画という媒体を通して表現した作品なのであって、絵師や注文主、そして享受者たちの時代のメッセージの一現象なのである。

そのことは、当初に画の約束事の上に成立した「洛中洛外図」や「江戸図」屏風は、結果として都市景観図としては最小の必要条件（目的としての「都市の心象風景」）が画として表現されているのである。つまり、直接の事件や建築物の実態などをレポートする性格の絵画ではなかった。したがって、描かれた建築の有無で景観年代を決定したり、描かれた都市構造をそのまま現実のものとしてとらえるのは、絵師の当初の意図とは異なるのである。

それは、制作時点でたとえばその寺院が焼失してなくとも、あらまほしき都市景観の一つのイメージとして必要であれば、絵師はあえてその図を描き込んだからである。「あらまほしき」京や江戸のイメージを構成し、平安京や江戸の地を舞台に人びとの姿を桃山様式の金碧の美で仕立てあげたのが「洛中洛外図」や「江戸図」屏風なのである。

さて、美術史における様式としての「桃山様式」の一つ「金雲」技法、つまり金箔押し地による源氏雲の連続的な区切

りによって時間・空間的に画面の構成上一種のファジーな効果を生み出す技法を用いた都市景観図は、日本の都市景観図の第一段階に相当する。

「洛中洛外図」と、それに続く「江戸図」などの金碧屏風絵の一群が、この第1タイプの都市景観図に相当する。この第1タイプの画面の構成は、土佐派や狩野派の絵師の描いた扇面画や画帖絵などの「名所図」の各モチーフを組み込み、地理的な整合性を絵地図から起こし上げた描写法（俯瞰図法）で表現した作品である。

こうした第1タイプの都市景観図は、室町後期に形成され、江戸期へ継承されたが、その「江戸図」としての代表作は、寛永期の建設途上の武都を描いた出光美術館所蔵の「江戸名所図」屏風八曲一双と、徳川幕府三代家光の事蹟を顕彰したともいべき江戸とその北郊を鳥瞰した国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図」屏風六曲一双である。この二つの屏風絵は、地理的な主題が新しい権力の拠点「江戸」に置かれたということに比して、その部分的な構図のいくつかは京都への憧憬にあるといえてよい。そして、そのことは、新しい「江戸」の、そして新しい権力者徳川家とそれを支える武家組織の、とりあえず目標とした文化の有り様を示しているといえよう。

歴博本「江戸図」屏風は、内容的に見れば「徳川家光一代記図」および「江戸と江戸近郊図」の屏風というべき作品であり、これが描かれた内容を表現した作品名に相当すると考える。また、本図が寛永期の時代をテーマとして描いているからといって、制作期を寛永期に即断してしまう論者たちの早急な結論の導き方も、再考を要する。

さて、こうした第1タイプの都市景観図に対し、近世後期になるとさらに新しい都市景観図が登場する。それが一点透視図法を用い、シームレスで都市景観を疑似的に表現した画である。その代表作が、鍬形紹真（津山藩松平家御用絵師、元は江戸の浮世絵師北尾政美）の描いた「江戸名所之絵」あるいは「江戸一目図」と称される作品である。西洋画法の一つ、一点透視図法が長崎を経て導入され、浮世絵の浮絵、円山応挙の眼鏡絵、覗きからくりなどで実践化された。文化六年（一八〇九）の款記のある鍬形紹真画「江戸一目図」屏風（元は襖絵）は、独特の淡彩画で、略画式のタッチとともに江戸を深川あたりの上空から富士を眺めやる一点透視図法の作品である。画中には人物など居ないようにみえて、実は細かく登場しているのが特徴であり、火の見櫓の位置などをはじめ、それぞれの建造物の位置関係も整合性が

ある。もっとも、この絵が、いわゆる金雲や、すやり霞などの空間処理法を持ちいてないからといって、決して一軒一軒を写実的に描いているわけではなく、写実的に見えるようにあるブロックを一つの構図として組み合わせて、一見写実性のあるように仕立てた、いわば「だましの集成図」といえる。この屏風絵は、すでに享和三年（一八〇三）年八月に出版許可を受けた同じ絵師の摺物「江戸名所之絵」の大画面バージョンである。こうした新しい視点の、第2タイプ（註1）の都市景観図は、同時代人たちの驚きをもって迎えられ、多色摺り木版画や銅版画によって一点透視図法によるシームレスの都市俯瞰図が多量に生産され、供給されることとなったのである。

ここで、管見する江戸図の屏風絵を一覧して見ると、次の通りである。

- (a) 「江戸名所図」屏風 紙本金地著色八曲一双 出光美術館所蔵
- (b) 「江戸名所遊楽図」屏風 紙本金地著色六曲一隻 細見美術館所蔵
- (c) 「江戸図」屏風 紙本金地著色六曲一双 国立歴史民俗博物館（旧林家所蔵）
- (d) 「江戸名所図」屏風 紙本金地著色六曲一隻 細見美術館所蔵
- (e) 「京都・江戸絵図」屏風（註2） 紙本金地著色六曲一双 江戸東京博物館所蔵
- (f) 「江戸風俗図」屏風 紙本金地著色六曲一双 出光美術館所蔵
- (g) 「江戸図」屏風 紙本金地著色六曲一双 本田家所蔵
- (h) 「日吉山王社参詣・日光社東照宮社参詣図」屏風 紙本金地著色六曲一双 江戸東京博物館所蔵
- (i) 「江戸天下祭図」屏風 紙本金地著色六曲一双 某家所蔵（旧本圀寺所蔵）
- (j) 「江戸図」屏風 宮川一笑筆・紙本著色六曲一双 所在不明（旧渡部家所蔵）
- (k) 「江戸一目図」屏風 鍬形紹真筆・紙本淡彩六曲一隻 文化六年 津山郷土博物館所蔵
- (l) 「江戸図」屏風 紙本淡彩六曲一隻 厚木市教育委員会所蔵

### 三 新出の「江戸図」

内外における一連のいわゆる江戸の都市景観を描写した「江戸図」<sup>(註3)</sup> 屏風を中心とした調査において、いくつかの新出資料が浮かび上がってきた。それが、前記リストのうちの (h) (i) (l) である。

前述した通り、「江戸図」屏風にはその景観構成上二つのタイプに分類される。その一つは、雲形をもって不必要な部分をカットするタイプで、「洛中洛外図」屏風の流れをひく歴博本「江戸図」屏風や出光本「江戸名所図」屏風（八曲一雙）などを代表とする、江戸初期に成立する作品群である。もう一つは、景観をシームレスな状態であたかも上空から見たような疑似体験をさせる俯瞰図のタイプで、鋏形紹真の筆になる「江戸名所之絵」（一枚摺り）や「江戸一目図」屏風に代表される江戸後期に成立する作品群である。

後者のタイプの「江戸一目図」屏風は、江戸の町並みをシームレスな景観として透視図法を用いた俯瞰図であり、すでに享和三年（一八〇三）に鋏形紹真は大々判の「江戸名所之絵」を上梓しており、これらの新しい江戸の都市景観図は広く流行し、数本の肉筆画をはじめ、再版摺や子孫の版、そして構図を引用した作品が数多く明治初年まで作られた。

こうした江戸の景観を描いた屏風絵をはじめとする絵画は、その制作過程について様々な推測がされてきている。たとえば、歴博本「江戸図」屏風は、その景観年代や制作年代についての論争が激しいが、一方で現在最古の版本による江戸図としてよく知られる「武州豊嶋郡江戸庄図」がその地理的景観の下図であろうと従来より言われてきたし、またそうであろうとの勝手な推測をしてきたのも事実である。

しかし、加藤貴氏によれば、各種の江戸の地図の諸本の検討や、原本の所在の不明な江戸図（たとえばこの「武州豊嶋郡江戸庄図」もそうである）の現状分析などから、どうやらそのままこの「武州豊嶋郡江戸庄図」を下敷きに用いたと考えるのは大変危険であるとの指摘がなされている。<sup>(註4)</sup> もちろん、「江戸図」屏風の制作に、地図というものが有効な情報源であったことは間違いないのであるが、どういう地図やデータを情報源としたかについては、もっと慎重に検討しな

ければいけないのである。

さて、このように「江戸図」という絵図の屏風の成立にかかわる地図の「江戸図」と、その制作過程を考察するのにちょうど都合のよい作品が出現したのである。それは、先のリストに掲げた後尾の(1)であり、神奈川県厚木市教育委員会に現在所蔵されている「江戸図」屏風である。

#### 四 厚木市本「江戸図」屏風について

厚木市教育委員会所蔵本「江戸図」屏風(以後、厚木市本と略称・図1)は、落款も署名も年紀も記されておらず、所伝も不明である。画は紙本淡彩で、現在は中屏風(画面実寸一一七・七×二六四・〇cm)に仕立てられている。しかし、詳細に調査してみると、本来は絵図として作られて折り畳み状に保管されていたものが、屏風として仕立て直しをされたことが判明した。それは、折り跡や紙継ぎの具合などから判明した。

このことで惜しまれるのは、左右の部分が屏風仕立てにする際に、屏風の画面寸法に合わせるために本来あったと思われる左右の部分が裁ち落とされてしまったということである。とくに右側には、浅草寺や吉原などが連続して描かれていたと想定され、トリミングされた部分があったと思われる浅草・吉原などの地域の重要な情報源がこのことにより失われてしまったことは、たいへん残念である。この絵図の市場価格を釣り上げるためであろうか、屏風仕立てとした結果であろう。

厚木市本が描いている江戸の都市景観の地域は、江戸城本丸を中心とした江戸城城郭と内堀・外堀の掘割を中心にして、東は隅田川の東岸地域を少し取り込み、北は(恐らく浅草寺・待乳山聖天・吉原あたりも描かれていたと想定される)現状では東叡山寛永寺と不忍池あたり(図7)や「板橋」の地名書き込みで表現され、西は護国寺あたりまで、南は品川あたりとなっている。

もちろん、鍬形紹真の「江戸名所之絵」や「江戸一目図」屏風などの一点透視図法による俯瞰表現の景観構成と内容が

参考にしたのであろうということは、明白である。しかし厚木市本は、それらにない地域の様子も描き込んでいる。また地理的な表現、たとえば鍬形紹真の作品の場合は絵画的な遠近感を強調するため東海道を新橋あたりまで稲妻形に（本当はほぼ真っ直ぐな道なのに、わざとジグザグに描くことにより奥行きを出す）描いているが、この厚木市本ではむしろ、おのおの道の曲がり具合のほうを重視した表現となっているのである。このことが、厚木市本の成因を物語る重要な要素であり、また地図から絵図、そして絵画としての都市景観図といった、創作の思考および実行過程を知る上で、たいへん貴重な事例であるということが厚木市本の登場で言えるのである。

さて厚木市本の特徴を、列記してみよう。

- (1) 俯瞰的な江戸の住まいの実体を復元することに有効な資料であること。
- (2) 地図を具体的な視覚情報資料として絵図化した「江戸図」である。
- (3) そのことにより絵画としての「江戸図」屏風の制作過程の一部分が想定できる。
- (4) 描かれた大名屋敷やその構え(図3)、町並み(図4)、架橋、火の見櫓、邸内や戸外の樹木の様子、芝居や見せ物の興行の小屋、木戸や道ばたの小屋など、江戸の都市景観にかかわる住生活の基本が具体的な視覚化による表現がされている。
- (5) 龍の口にある屋敷に「龍口御上ヤシキ」と書き込まれている(図2)ことから大名細川家の家中で作成した可能性の高いこと。
- (6) また、各大名屋敷の配置と、江戸の地理的要素(たとえば広小路や掘割、特徴ある地形、坂、曲がった道など)を丁寧に描いていることなどから、おそらく細川家の新規江戸詰め家臣(国元から初めて江戸へ出てきた者)への江戸案内の視覚教材として制作された可能性の高いこと。

(7) これらの絵画情報に書き込みがあり、絵画と文字の二つの視覚情報により、位置関係や必要な事物を表現していること。

(8) 厚木市本には、江戸の名所が多く描き込まれているものの、従来の「江戸図」屏風に描かれた人物が、一切登場しない。

これらのことをから、厚木市本は、(a)江戸の地理的な情報、すなわち付き合ひのあるあるいは重要な大名家や幕臣の邸宅の場所の情報、(b)江戸の名所地の情報、(c)それらの情報を立体的視野のもとに俯瞰できる構図として描写するのに、先述した江戸後期のシームレスな透視図法を用いた江戸図屏風のタイプで表現した点(雲形の括りや霞の輪

郭などが描かれるが、基本的には景観としてつながりが構成の主体となっている（に新鮮味があること、そして（d）それを視覚教材として活用するために制作されたと考えられる絵図としての「江戸図」屏風であること。また、（e）「江戸一目図」屏風や版本の「江戸名所之絵」のように細緻な描写でも略画人物が数多く描かれたのに比べ、厚木市本に人物が登場しないということこそ、厚木市本が地図を基調とした案内絵図、すなわち情報絵図という性格をもっていたことを、ここに指摘できる。

地図を絵図化したということは、第3扇の上部に丸枠のなかに「東西南北」と朱書きされた方位が記されていることから明白である。

描かれた情報から、描かれた景観年代のおおまかな上限と下限が推定できる。それは、次の二点である。まず上限の時期であるが、本図の谷中の部分に「谷中感應寺、當時天王寺ト寺改」と書き込みのあることから、天保六（一八三五）年九月が相当すると考えられる。それは、天保四（一八三三）年十一月に谷中の感應寺（法華宗不受不施派）が幕命により雑司ヶ谷へ移転となり、その跡地に天保六（一八三五）年九月に天台宗の天王寺が創建されて、寺号を改めた直後の経緯を物語っているからである。

ついで下限であるが、図中に「フキヤ丁市村座」「サカイ町中村カン三郎芝居」と書き込まれている葺屋町市村座と堺町中村座の両座芝居小屋の存在（図5）から、両座が森田座とともに浅草の丹波国園部藩小出家の下屋敷跡へ替え地として移転する以前の、天保十二（一八四一）年十月が相当すると考えられる。この両座は、天保十二年十月七日の早暁に中村座から出火し焼失した。齋藤月岑編『武江年表』によれば「（天保十二年）十月七日、暁七半時、堺町より出火、両座芝居、堀江六軒、元大坂町、新和泉町、新乗物町其の外類焼」とあり、翌年二月に両座が浅草の丹波国園部藩小出家の下屋敷跡へ替え地として移転した旨が記されている。『徳川実紀』にも、同年十月七日の条に「堺町勘三郎座より火いで、葺屋町その他焼失す<sup>（註5）</sup>」とある。こうしたことから、本図ではこれ以前の両座両町の様子を描いたものである。

これらの図や書き込み、そして大名の受領名などから、厚木市本は、上限を天保六年九月、下限を天保十二年十月とし、一八三五〜四一年頃の状況を示しているものと推察する。さすれば、この時代の熊本藩細川家藩主は、細川<sup>なりもり</sup>齊護に



当たる。

また赤坂御門外の紀伊家が描かれた右側（北側に相当）には雲形のなかに矩形状のものが線描としてみられる（図6）が、これは吹上への水道のサイフォンであろうとの見方もあるが、水道関係の資料を搜索しているものの、いまのところ不明であり、むしろ塀を描きかけたところと見た方がよいと現時点では考える。また、日吉山王社が「三王宮」と書かれるとか、増上寺が「増正寺」と書かれる（図8）など、いくつかの誤字・宛字がみられる。

本図に書き込まれている名称は、江戸城や徳川御三家、そして細川家をはじめとする大名屋敷、そして神社仏閣、地名（坂・窪・町・橋・堀・門ほか）などで、総数五二九件にも達する。また判読不能なものもいくつかある。これらの文字データと、絵図として描きおこされた屋敷構えや建造物、地形や通り、河岸、橋、火の見櫓、船、樹木、木戸など、本図は大変貴重なデータを提供してくれる。大名家は、受領名のほか、御三家は「殿」付け、その他は「様」付けが補筆（墨の色が違い、また付け加えて書いたことが位置関係からもわかる）されている。また「様」付けのない大名屋敷もある。これらは上屋敷と下屋敷を区別するためのものかとも思われる。なお「松平大膳太夫様ヒノキヤシキ」のように特記されている大名屋敷もあり、当時の評判を書き込んだものと思われる。

細川家の別邸は「濱丁御ヤシキ」と記されている。浜町の別邸は、天保期前後に移動がある。天保十四年「御江戸大絵図」（高井蘭山図・岡田屋嘉七板）を見ると西本願寺近くの万年橋そばに細川越中守の別邸があるが、本図では「井伊右京太夫様」の屋敷となっている。この点、天保期の別邸の移動を調べれば、本図の成立期がより狭まるかも知れない。しかし、随所に追記や改竄の跡が認められることから、天保期六年以降の制作後、さまざまな状況の変化において改修して用いられたものであろう。

江戸城は「御本丸」のほか「西ノ丸御殿」などが表記され、明暦の大火以降再建されなかった天守の位置に「天守台」と書かれた露座の天守台が描かれている。屋敷名にも大火の多かった江戸を象徴するように「火消ヤシキ」や「定火ケシ」の名も見える。「日本橋」には、「タカ札（高札）」も書き込まれ、また呉服の本店で有名であった本町の三井越後屋をはじめとして恵比寿屋・布袋屋・亀屋・松阪屋などの名前も見える。時の鐘は、芝切り通しのものが描かれている。

本稿では、紙数の都合で全データを提示できないが、これらの全データと分析の結果については別稿を用意している。

このように、厚木市本は、江戸の景観図として、絵画としての「江戸図」屏風（たとえば歴博本など）が制作されるにあたり、地図や記録などを手がかりとした制作過程における際、絵画として強調されたり、歪曲されたり、削除されたりする情報があったことを、比較の上で確認することができ、また一方で地図を視覚的な情報として仕立てるために絵画化した好個の例として提示することができよう。

都市景観の復元を、このような性格の異なる絵画資料から、より正確なるデータを見いだし、活用するためには、むしろそれぞれの資料の性格吟味と、その資料の成立要因や利用の用途を、そして何を用いて、どのように加工して、どのように表現したかの調査・研究が必要なことを痛感させられたのである。

末筆ながら、厚木市本の調査・図版掲載などに便宜を与えて下さった、厚木市教育委員会と大野一郎氏に感謝の意を表す。

## 註

- (1) 小澤弘「都市景観図の形成に関する一考察―江戸一目図屏風」をめぐって 付・「名所風俗図」の研究における諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第六〇集所収。一九九五年。
- (2) 左・右隻に京と江戸の絵地図を描く。江戸東京博物館では「江戸京都絵図」屏風の名称で呼んでいるが、これは「京都・江戸絵図」屏風の呼称の方が、都市の成立の歴史的順序からみてよいのではないかと思う。
- (3) 江戸図屏風研究会は、小澤と波多野純・加藤貴・丸山伸彦氏の四人のメンバーで構成される。一九九二年より、「江戸図」の絵図や地図の集成と調査・研究を実施することを目的として結成された。途中、住宅総合研究財団の研究助成を受け、国内外の調査を実施。

(4) 加藤貴「寛永江戸図の再検討」(『日本史攻究』二四号所収)

(5) 徳川本には年の巻末にこの記事があったことが付記されている。(新訂増補国史大系『續徳川實紀』第二編四四〇頁。吉川弘文館刊)

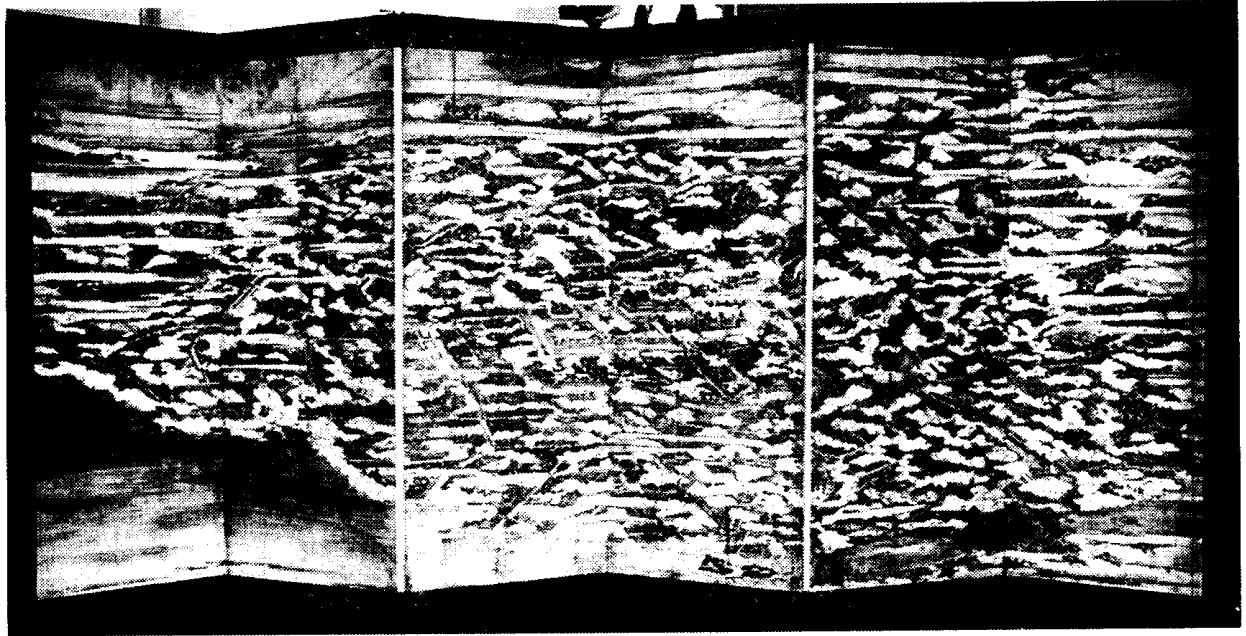


図1 厚木市本「江戸図」屏風全図

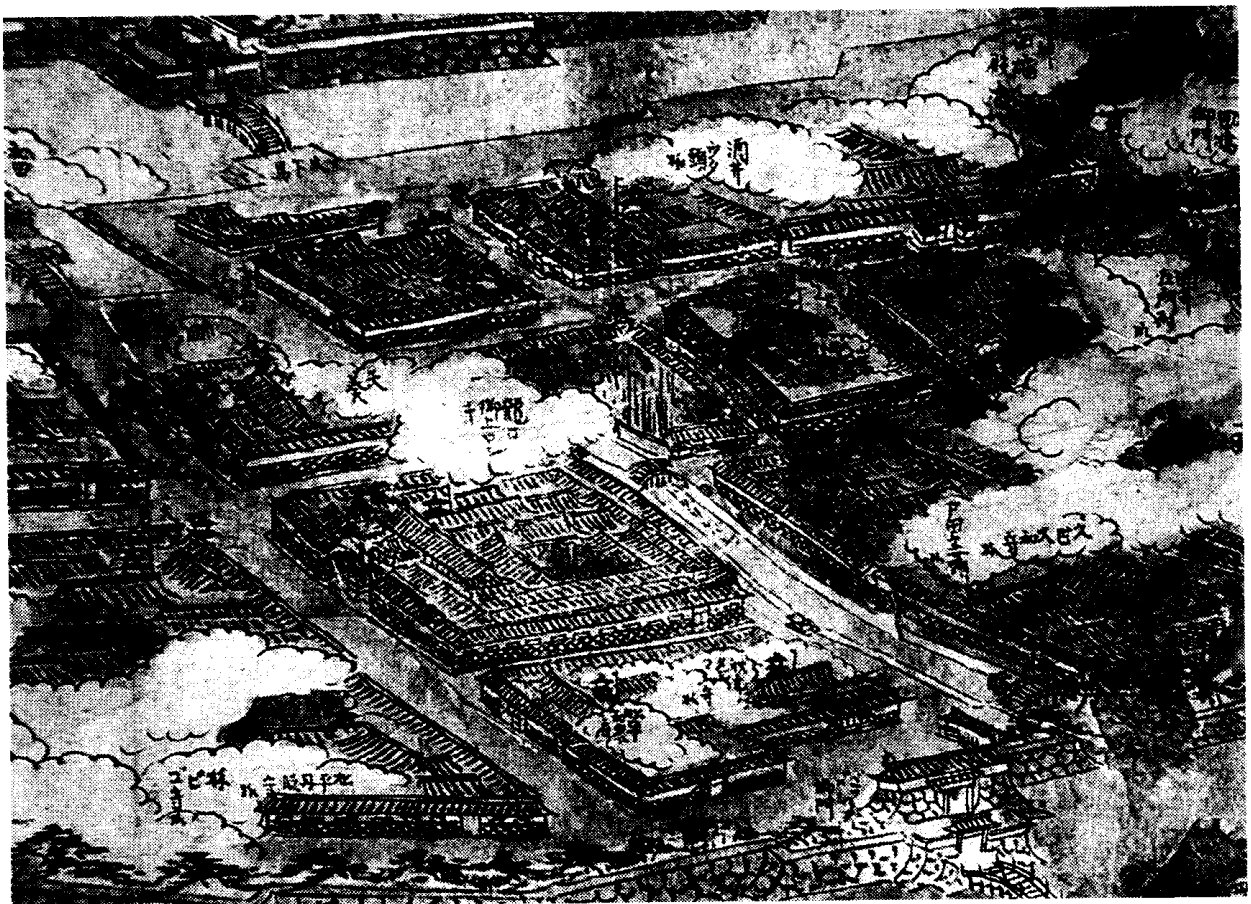


図2 龍口上屋敷（細川家藩邸）

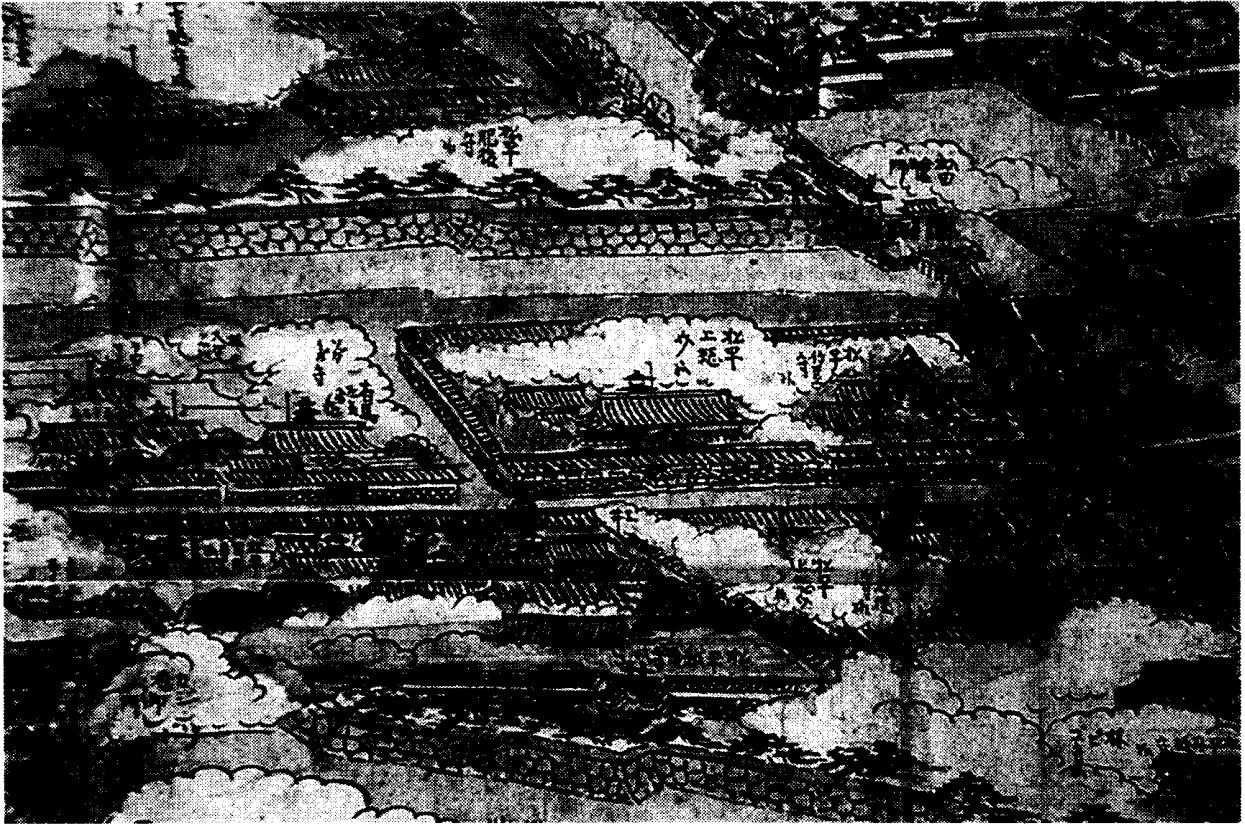


图3 大名小路・鍛冶橋御門周辺



图4 日本橋界限

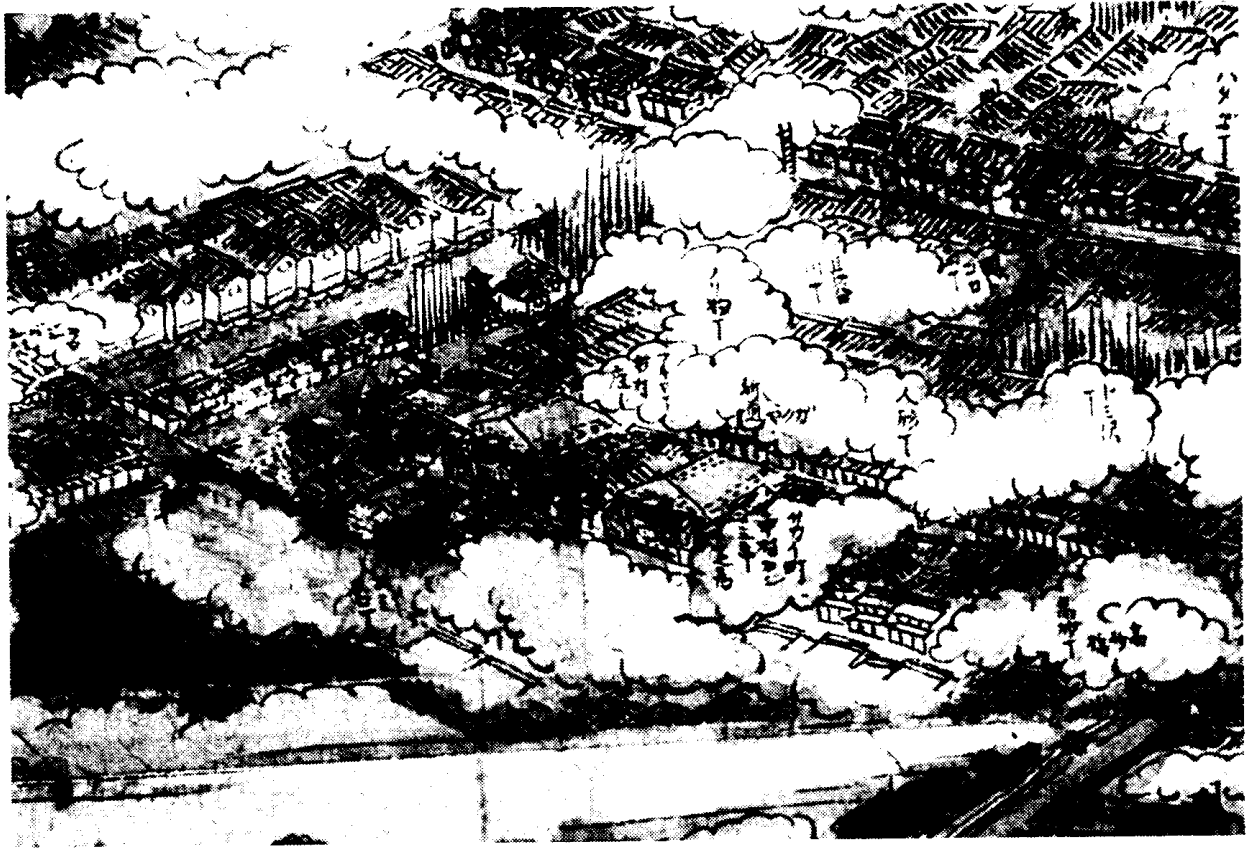


図5 芝居町（中村座・市村座）周辺

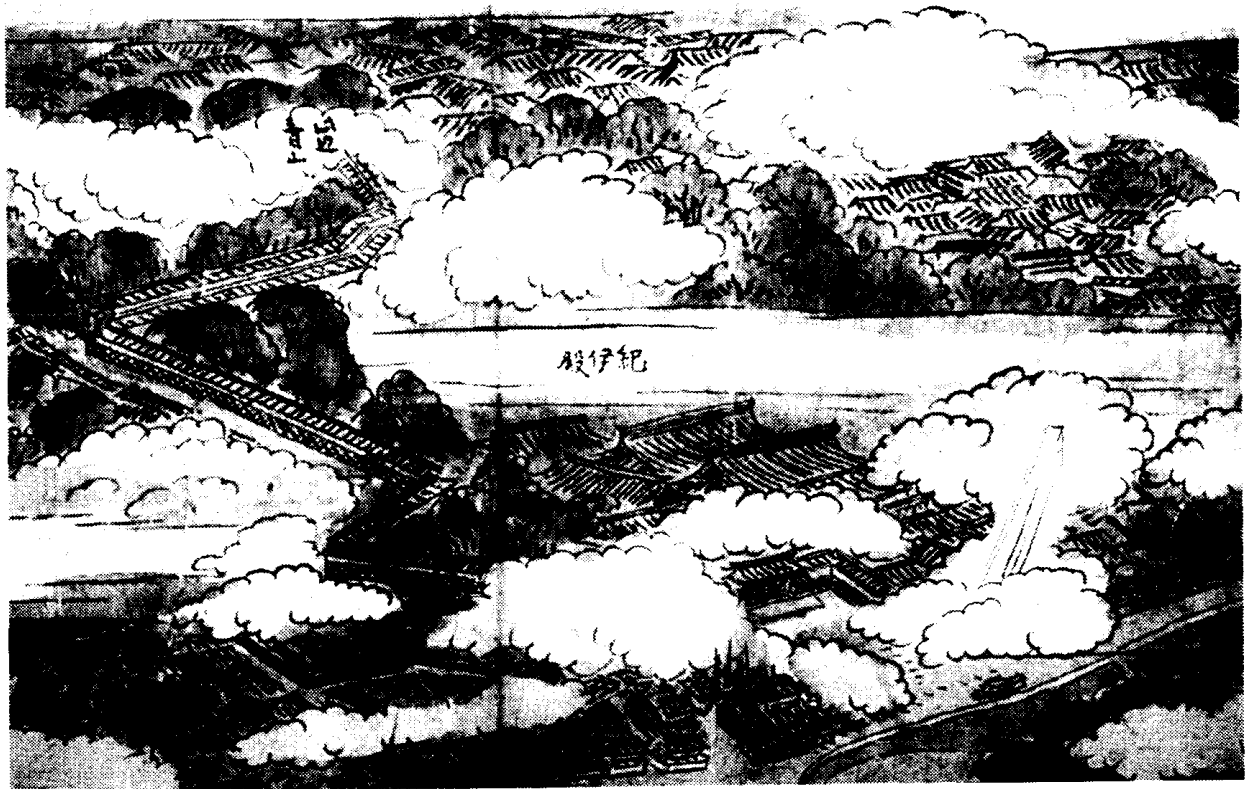


図6 紀州徳川家藩邸

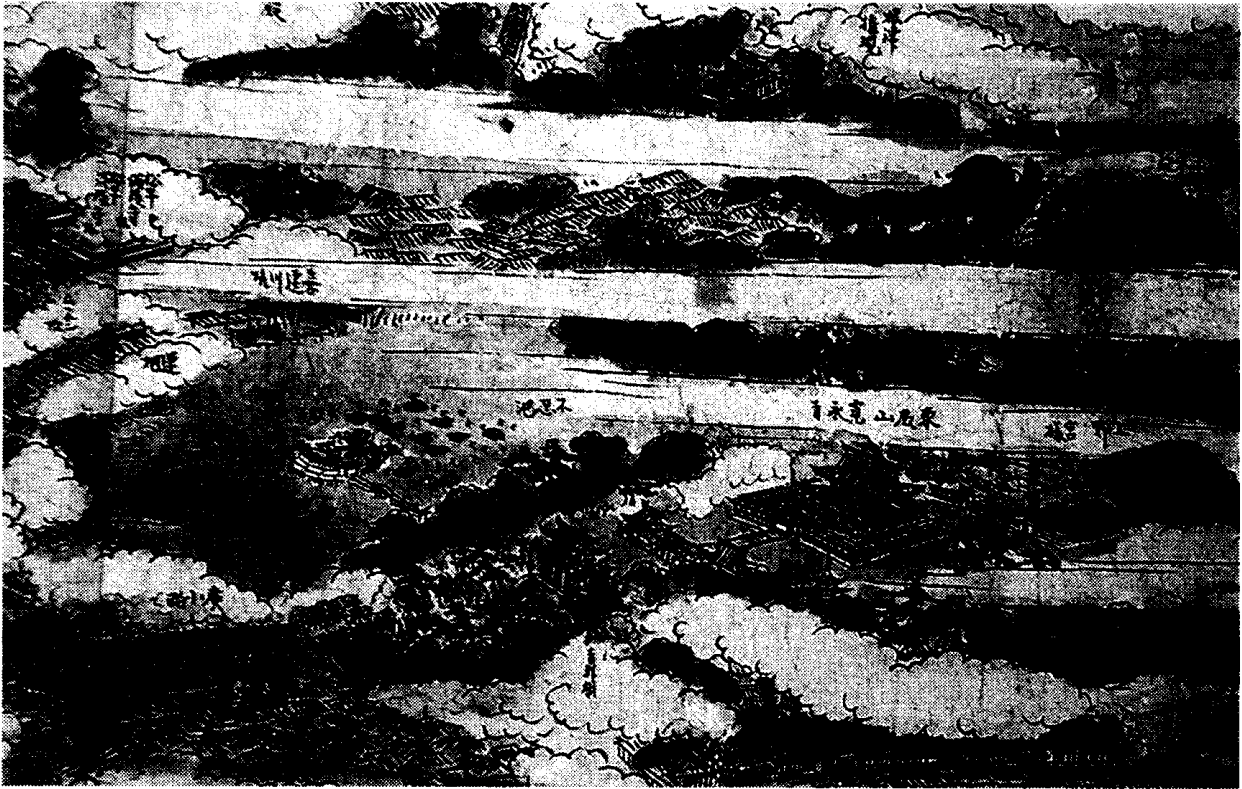


図7 上野広小路不忍の池・東叡山寛永寺・天王寺・根津権現.



図8 増上寺（「三縁山増正寺」）